

2023年度 国語入試問題

(2023年2月5日実施)

座席番号									
------	--	--	--	--	--	--	--	--	--

[注意]

1. 試験監督者の指示があるまで、問題冊子や筆記用具に触れないでください。触れた場合は、不正行為とみなすことがあります。
2. 試験中の使用が認められたもの以外は、すべてカバンに収納すること。使用用具は、黒鉛筆またはシャープペンシル、消しゴム、鉛筆削り（手動式・小型に限る）とし、それ以外の使用は認めません。
3. 携帯電話、スマートフォン、イヤホン、ウェアラブル端末、電子辞書、ICレコーダーなどの電子機器類は、必ず電源を切ってから、カバンに収納すること。
4. 試験開始の合図により、試験を始めてください。
5. 解答は、すべて「解答用紙」の所定の欄に記入すること。
6. 試験終了の合図とともに直ちに筆記用具を置いてください。試験終了後に解答用紙や筆記用具に触れた場合は、不正行為とみなすことがあります。試験監督者が指示するまで、絶対に席を立たないでください。
7. 問題冊子および解答用紙は、試験終了後にすべて回収するので、持ち帰ってはいけません。

問題Ⅰ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

怪物という表象のもつ意味を整理してみよう。古代ギリシャ人の世界図のなかで、怪物は世界の周縁（果て）にあるものであった。彼らにとってはこういう図式があったといえるだろう。

「われわれ」の世界—中心—西欧—「正常」

「彼ら」の世界—周縁—非西欧—「異常」

「驚異」mirabilisとは異常なもの、驚くべきもの、不可思議なもの、予期しないもの、通常ではないものを意味する言葉であり、否定的にも肯定的にも使用される。ヘロドトスからマンデヴィルに至る西欧人にとって「正常」なものは彼らの住む地中海世界または少なくとも西欧世界のことである。

一方、アジアやアフリカなどはその構造も人種も風習も動植物も気候も「異常」なもの、「驚くべきもの」とされる。多くの西欧の旅行記が伝えた「東方の驚異」とは、「正常」が中心に据えられたあとで、周縁に「異常」を置くという世界観の枠組のなかで創造された概念である。一般に、民族や国家は、自分たち（われわれ）とは異なったものを持つことよってのみ、自分自身が何であるかを確認することができる。つまり「世界の果て」を創り出すことよって、自分たちのいる場所を「中心」として規定することができるといつてよい。

(1) このような意味で、異形の怪物は、西欧文化にとっての「他者（自分と違うもの）」のもっともはっきりした表象であったということが出来る。その関係は以下のようなものになる。

自己（西欧⇨人間⇨文明）

他者（非西欧⇨人間+動物〈怪物〉⇨野蛮）

西欧文明は絶え間なしに、この「他者」のイメージを創造していくことよって、自分の正統性、中心性、普遍性を確認してきた。しかし、その場合に、彼らにとつての「他者」から見れば、彼ら自身がその「他者」であることは想像しなかったといつてよいだろう。しかし、西欧の東方への視線は、古代・中世・近世と経過する西欧社会の構造変化に（トモナ）^(a)変化している。軍事国家であり、ペルシャ等の異文明と恒常的な戦闘状態にあった（アレクサンダー大王のときにはインドまで侵入した）古代ギリシャ、ユーラシア大陸における帝国支配体制を敷いたローマにとつては、他者とはすなわち A であつた。また、キリスト教的中世にとつては、東方の世界は何にもまして「異教徒」の支配する恐るべき世界であり、これは強大なオスマン・トルコの絶え間ない脅威によつて（b）^(b)ゾウフクされた。 I しかし、そこには、回教圏、仏教圏が伝承している諸科学・文化の優越性の認識があり、野蛮・未開の対立観念は後退し、畏怖とともに憧憬の要素が交っている。 II

決定的な変化は大航海時代以降に起こつた。 III コロンビア大学の社会学者イマニュエル・

ウォーラーステインは地球的文脈と歴史的視野から発展の問題を考え、『近代世界システム』で、今

日の世界経済は一五世紀の末までさかのぼること、この時代を、一六世紀と一七世紀に完全に発達し、産業革命以前にすでに成熟していた世界システムの始まりだと解釈した。

IV

つまり、一四五〇

年から一五五〇年のあいだに封建制のシステム崩壊が起こり、一五五〇年から一六五〇年までに資本主義的世界システムはすべて基本的に整備され、一七六〇年から一八三〇年までの産業革命はそれを完成させたにすぎないと考えた。

V

あらゆる点からみて⁽²⁾この歴史観は妥当なものだと私は考えている。彼のいう「世界システム」とは、個々の国家や文明がその地域のなかで孤立して経済秩序をつくっているのではなく、地球上の国際的な経済秩序と国際的な分業を^(c)トクチョウとして一つのシステムをつくっていることを意味している。このシステムでは、先進文明が中核となり、そのまわりに低開発の半周縁・周縁の領域を設けて、この中心が利益を得るために、周縁が搾取されるというやり方で機能する。近代史は世界の多くの部分がこのシステムに取り込まれていく過程であった。

この過程の始まりである一六世紀において、西欧は科学思想や航海術・天文学の発明などの技術の先進的な発達によって、「世界の発見者」「世界の宗主国」となり、アジア、アフリカ、アメリカは「発見され、植民される」対象となった。文化史的にみれば、一六世紀から一八世紀の「ヴンダーカマー（驚異の部屋）」の収集熱、木陰に眠る黒人をアルマジロやサイや極楽鳥と同じく珍奇な文物として「グロテスク文様」に描くといういわゆる「異国趣味」の美意識、王侯の栄光化のために隷属する異国の怪物をはべらせるといふ発想などはみなこの時期以降に起こったことである。

以上のように考えてみると、最初にあげたフランス、イギリス、ネーデルラントの王侯たちが凱旋門や凱旋行列の下に怪物たちをくくりつけて喜ぶ「怪物好み」の流行に従ったのは、ちょうど彼らヨーロッパ人が、アメリカ、アフリカ、そして「東方」に向けて植民を始め、その珍奇な物産を収集し始めた時代の美意識だったということがわかる。

これらの君主たちの凱旋馬車や凱旋門の下にうずくまっている怪物は、ヨーロッパ人とは異なったもの、奇妙なものに^み充たされた異国であり、ヨーロッパの飾りとして、また従者として周縁に付随する他者の表象だということができる。

産業革命を達成し、大規模な産業システムが大量の生産を可能にし、市場の開発、低廉な労働力、資源の入手のために、近代化された国民国家が、世界的な規模で「東方」に進出しあった一九世紀の状況を、歴史家は帝国主義の時代と呼んでいるが、この時代には、それぞれの国家がそれぞれの民族・人種・文化的伝統を「正統」として相互に^(d)ハイジヨ、敵対しあうようになった。したがって、西欧・キリスト教文化圏なる統合はもはや解体したかみえた。二〇世紀半ばのファシズムの時代には、ドイツによるアリア・ゲルマン至上主義が、ついに異人種であるユダヤ人の「壊滅（ホロコースト）」を掲げ、それを実行するまでにエスカレートした。この時期、日本もまた独自の神を信奉する「神国」として独自の文化伝統を創造し、西欧を「敵・他者」として闘ったことは記憶に新しい。

第二次世界大戦後、アジア・アフリカ・南アメリカ等の諸国、諸民族が、植民地の状態から解放または独立し、すでに吸収した西欧の文化・科学・思想を包含しつつ、それぞれの民族的・国家的アイデンティティーを確立し始めた。この時期をポスト・コロニアル（植民地以後）の時代と呼んでいる。

ポスト・コロニアルの時代、つまり今の時代は(3)画期的に新しい時代であり、人類が古代以来伝承してきた歴史の見方、世界の見方に徹底的な(e)ヘンコウを迫られる時代である。西欧は「ア」を喪失した。したがって、それを支えていた「イ」も理論上は存在しない。かつての宗主国とかつての植民地は、それぞれの過去を新しく再編された地球の地図の上で自己批判し、再解釈し始めている。そのときにかつての植民地国の知識人たちが重要な役割を果たすことになった。アラビア系のパレスティナ人であるエドワード・サイードは、『オリエンタリズム』『文化と帝国主義』という本の中で、「対位的思考」の枠組みを提案している。それは一言で言えば、物事には相反する二面があるということを理解すること、多様な見方を統合するというよりは互いに響かせあうことが重要だということ考えである。

文化の歴史を語るときに、かつては、正統とされる見方が確立していた。今までの歴史(文化史や美術史を含む)は、西欧先進国家(人種的にいえば白人)を中心にした見方、語られ方で書かれてきたといえるだろう。私はここでは自分の専門である西洋美術史のことをいっているのだが、日本であれば、それは日本中心の語られ方、見方である。もともと、歴史家はいずれかの視点に立つのが当然だから、自分の視点をもつことはまちがったことではない。しかし、同じ事柄であっても、事物・事件には、また他方の見方があるということを考えないのならば、(4)それは偏った見方になる。世界を構成している多様な文明や人種のそれぞれの側の見方、考え方を同時に見ていくべきだという考え、特にかつての宗主国と植民地のかかわりのなかで、それぞれの固定した見方を壊し、新たな見方を提案していこうとする思考の方向、それをポスト・コロニアルの歴史観・文化史観と呼んでいる。

(若桑みどり『イメージの歴史』)

(注1) ヘロドトス……前五世紀に活動した古代ギリシアの歴史家。

(注2) マンデヴィル……十四世紀に活動したイギリスの医師、旅行家。

(注3) 大航海時代……一五世紀半ばから一七世紀半ばまで、西欧各国によるアフリカ・アジア・ア

メリカ大陸への大規模な航海が行われていた時代。

問1 傍線部(a)～(e)と同じ漢字を含む語を、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、

(a) 1、(b) 2、(c) 3、(d) 4、(e) 5。

(a) トモナつて

1

- ① 生涯にわたるハンリョと出会う。
② ハンザツを極めた仕事に取りかかる。
③ この製品はハンヨウ性が高い。
④ 緊急ハンソウによって助かる。
⑤ 河川のハンランを食い止める。

(b) ゾウフク

2

- ① 衝撃エイゾウが人びとを震撼させた。
② そのカメラは露出計をナイゾウしている。
③ ゾウオに満ちた感情を表現する。
④ 売上げが去年からバイゾウした。
⑤ 母校に電子オルガンをキゾウした。

(c) トクチヨウ

3

- ① 愚かな行動がチヨウシヨウを買った。
② ケンチヨウ所在地を覚える。
③ 町内会費をチヨウシユウする。
④ 長い助走からチヨウヤクする。
⑤ 予算をチヨウカする恐れがある。

(d) ハイジヨ

4

- ① 母校は毎年有名人をハイシユツする。
② ゴミが詰まってうまくハイスイしない。
③ 優勝のシユクハイをあげる。
④ 有名なハイクを鑑賞する。
⑤ 恩師からの手紙をハイジユする。

(e) ヘンコウ

5

- ① 当日はコウセイな取り引きが行われた。
② 彼は福利コウセイ施設に勤務している。
③ コウセイに転じて逆転を果たす。
④ その小説家はコウセイに名を残した。
⑤ 非行に走った少年をコウセイさせる。

問2 傍線部(1)「このような意味」とあるが、この内容の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、。

- ① 自分たちが理解できないものの存在によって、世界の周縁や果てを実感できるということ。
- ② 自分たちと他者との比較によって、自分たちのいい面と悪い面とが理解できるということ。
- ③ 自分たちとは異なるものの存在によって、自分たちが何ものかを確認できるということ。
- ④ 自分たちを世界の中心に据えることによって、他者との違いが明確に意識できるということ。
- ⑤ 自分たちの世界の果てを創り出すことによって、他者の異常性をより強調できるということ。

問3 空欄 に入る最も適当な言葉を、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、。

- ① 「西欧」によって創造されるべき「東洋」
- ② 「国家」によって保護されるべき「民族」
- ③ 「特殊」によって賞賛されるべき「普遍」
- ④ 「正常」によって是正されるべき「異常」
- ⑤ 「文明」によって征服されるべき「野蛮」

問4 次の文は本文の一部である。どこに入れるのが最も適当か。本文中の ~ の中から一つ選びなさい。解答番号は、。

東方との交易は中世の商人たちにとって最大の利益をもたらしたからである。

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤

問5 傍線部(2)「この歴史観」とあるが、この内容の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、。

- ① 封建制のシステム崩壊は、産業革命によって引き起こされたという見方。
- ② 資本主義的世界システムは、産業革命以前にすでに整備されていたという見方。
- ③ 今日の世界経済の始まりは、封建制時代にまでさかのぼることができるという見方。
- ④ 産業革命は、資本主義的世界システムの成熟によってもたらされたという見方。
- ⑤ 経済の世界システムは、産業革命とは無関係に成熟、完成されたという見方。

問6 傍線部(3)「画期的に」の、本文における意味として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、。

- ① きちんとした計画に則^{のっと}って進められた、周到で綿密な
- ② 誰も予想できなかったくらい、意外で不可思議な
- ③ 既成の枠にとらわれていない、自由気ままで常識外れの
- ④ これまでになかったような、すばらしく目覚ましい
- ⑤ ほとんどの人びとが驚嘆する、派手で見栄えのよい

問7 空欄 ・に入る最も適当な言葉を、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、ア 、イ 。

- | | | | | |
|---|---------------------------------|-------|-------|-------|
| ア | <input type="text" value="11"/> | ① 先進性 | ② 生産性 | ③ 独自性 |
| | | ④ 主体性 | ⑤ 中心性 | |
| イ | <input type="text" value="12"/> | ① 怪物 | ② 周縁 | ③ 東方 |
| | | ④ 野蠻 | ⑤ 他者 | |

問8 傍線部(4)「それ」とあるが、どのようなことを指しているか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、。

- ① 西欧文化の正統性を基に、歴史を見るということ。
- ② 日本中心の考え方に立ち、歴史を語るということ。
- ③ 他者の見方を否定し、歴史を私有化するということ。
- ④ 自己の視点をもったうえで、歴史を語るということ。
- ⑤ 美術史という観点から、歴史を見ていくということ。

問9 二重傍線部「怪物という表象のもつ意味」とあるが、西欧文明にとっての「怪物という表象のもつ意味」とはどのようなものだったのか。四十字以内で説明しなさい。解答番号は、14。

問10 本文の内容に合致するものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、15。

- ① 西欧人は、自らの文明の優位性を強く意識し、自分たちが住む場所こそが世界の中心であると考え、なかで、世界の果てという概念を創造するようになった。
- ② 科学技術や航海技術等の飛躍的発達により世界中を運行できるようになった西欧諸国は、それまで人間が住んでいなかった場所を数多く発見することになった。
- ③ 中世の西欧にとって、東方世界とは、自分たちの理解の及ばない異教徒たちが支配する恐るべき世界であり、決して近づいてはいけない野蛮な場所であった。
- ④ 第二次世界大戦後、それまで西欧から搾取されてきたアジアやアフリカの国々は、西欧文明を全面的に否定し、自国文化の主体性を主張するようになった。
- ⑤ 現在求められているのは、歴史の見方の多様性を認め、過去の歴史のなかで固定化されてきた、西欧先進国家とその支配下の国々といった見方を壊すことである。

問題Ⅱ

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

かつて、ある授業で、難しい哲学問題に私自身分からなくなってしまい、しどろもどろ、冷や汗をかきながら終えたことがある。失敗した、そう思って教室を出ようとしたそのとき、あろうことか一人の学生が、⁽¹⁾「先生、今日の授業、分かりやすかったですね」と言ってきたのである。ここには、不特定の相手に何かを伝えようとする者が陥りがちな落とし穴がある。きちんと準備し、みごとな構成とわれながらほれほれし、よどみなく授業したとする。ダメなのである。そのとき教師自身がほれほれしているのは、「どう教えればよいのか」という教師自身の問題に対して、自分で合格点と思える解答を得たからにはかならない。しかし、学生はそもそも「どう教えればよいのか」なんて問題を抱えていないのである。だから、流れるように授業をしても、それが答えになるようなならかの問いを学生たちのもとに発生させなければ、学生はただ置いてけぼりを食わされるだけでしかない。他方、かつての授業で私は、授業中に問い直し、悩み始めた。そんなつかえつかえの進み方が、かつてよい方向に働いたのだろう。

聞いてもらおうとするならば、たとえ大人数の授業でも、対話型の授業をめざさねばならない。まず問いを発生させる。何だろう、なぜだろう、どうなっているんだろう、そうした問いの前に学生ひとりひとりを向かわせ、答えへの要求を生み出すのである。それから言いたいことを言えば、ほら、学生はみんな目を輝かせて……、と、いうほどうまくいくわけではもちろんないが、少なくとも、

A 失敗することだけは、目に見えている。

⁽²⁾書くことも同じである。ただ、書く場合には目の前に^(a)「チョウシュウがない分だけ、モノローグ型になりやすい。読者に問いを発生させることなく、ひたすら自分の言いたいことを書いてしまいがちなのである。だから、何かを主張したければ、「これはいつたいどういう問いへの答えになっていいのか」と自問するところから始めなければならない。「書きたいことから一歩退いたところから始めよ」と先に述べたのは、そういうことなのである。

(お気づきだろうか、私自身ここで、問いを発生させるという技術を少しだけ用いたことになる。「一歩退いたところから始める」なんていささか分かりにくい言い方をしておいて、読者に「どういふことかな」と思わせたかったのである。それから⁽³⁾「おもむろに」「どういふことかと言えばですね」と切り出す。うまくいったかどうかは心もとないけれど、まあ、⁽⁴⁾「それなりに工夫して原稿を書いているのでした。」)

書いていて、かなり一気に書ける場合と、話が一段落するたびに、しばし書く手を止めて「さて」と次を考えねばならない場合とがある。(正直に告白しよう。私はいまこの段落を書き始める前に、しばらく考えこんだ。書く内容は決まっていたのだが、どうつなげようか考えたのである。結果、ご覧のとおり、あまりうまくつながらなかった。)別に一気に書かねばダメだというわけではないが、ちよつと書いては次の策を練り、またちよつと書いては前を読み直す、というような書き方をしていると、ときに全体がバラバラになってしまうことがある。ひどいときは一文ごとに文章がとぎれることにもなりかねない。書き慣れていない人が長い文章を書こうとすると、^(b)「オウオウにしてそんなふ

うになるのではないだろうか。文章が動いていかないのである。うまくいくときは、先行する文章が自然に次の文章を生み出してくれるようになる。よほどうまくいくと、もう自分が書いているのではなく、湧いてくる文章をただ書きとめているだけという状態になる。私にもそのような経験がないわけではない。どこが違うのだろうか。

小説などでは、登場人物がかってに動き始めるなんてことがよく言われたりもする。しかし、いま問題にしている論理的な文章の場合には、むしろ問題がかかってに動き始めるとでも言うべきだろう。問いと答えの自己運動が始まるのである。まず問いが立つ。それに答えると、それが自然に次の問いを生み出す。そうならしめたものだ。まあ、なかなかそうはならないのが現実ではあるが、読ませる文章というのは、そのように、答えがそれだけで完結せずに、同時にそこに次の問いがかけられ、問いから答えへ、答えから問いへと運動が続いていくのである。逆に、拙い文章は一问一答の羅列のようになり、ひとつひとつ、ため息のように、動きが止まってしまふことになる。

文と文が互いに呼応しあい、連関しあってひとつの文章全体が形作られる。まさにそれが、「論理的な文章」にほかならない。ひとつの話題をめぐって書きたいことをただ連ねていくだけでは、けつして読ませる文章にも論理的な文章にもならない。表向きには主張が並べられているだけに見えても、背後にはその主張を導く問いかけがある。そして、それが問いと答えの連鎖として、ひとつの主張が次の主張の問いを用意するようにして、つながりあっていくのでなければならぬ。

難しい？ たしかに、なかなか難しい技である。だからこそ、⁵⁾経験を積み重ねなければならない。ただし、誤解されがちなことだが、たくさん書いたからといって、ここで私が言う「経験を積む」ことにはあまりならない。むしろ私が言いたいのは、たくさん「読んでもらう」ことだ。書くことに慣れない人というのは、書くことそれ自体に不慣れというよりも、見えない読者との対話に不慣れなのである。だから、日記のようにただ書くだけではなく、それを現実の読者のもとにとどけ、現実の反応に出会わねばならない。

そこで、論理的な文章を書くための、アなアドバイスをひとつしておこう。論理的に書く基本、それは接続詞にある。よりきちんと言えば、接続助詞なども含めたさまざまな接続表現をきっちり使いこなすことである。ここまで私は、論理的に書くためのひとつの基本的な^(c)シシンとして、問いを読者に共有させること、というアドバイスを与えてきた。何ごとかを主張するには、まず問いを呼び起こさなければならない。その、問いに対する応答のサインが、接続表現なのである。

例えば、「つまり」と私が書き出したとしよう。なぜ私はここで「つまり」と書いたのか。それは、直前の文に対して、読者が「どういうこと？」という問いを抱くと予想したからである。——私は「問いに対する応答のサインが接続表現なのだ」と書いた。そして、それがいささか分かりにくい表現であることを自覚した。読者は説明を求めてくるだろう。そこで、「つまり」と説明を始める。いまの場合、私はより具体的に説明した方がよいと考えたので、「例えば」と始めたわけだ。

あるいはまた、「なぜ？」という問いが生じると考えられる場合には、「なぜなら」と続けよう。

「そうするとどうなるのか」と問われるならば、Ⅰと応じる。誤解されそうだと思ったら、

Ⅱ「と補足し」、「ふんふん、それで？」と促されたならば、Ⅲ「とつないでもよい。

文をひとつそこに書く。それが誰かに読まれる。読んだ人は必ずや、その文になにがしかの反応をする。ひとつの文をそこに書きつけた者は、読者のその反応に応答する責任がある。ときに、予想される反応を裏切って、「しかし」と続けることもある。裏切ることも、もちろんひとつの応答である。

このように、接続表現とは、問いと答えのやりとりにおける、いわば「合いの手」となる。だから、モノローグ型の文章ほど、接続表現に (d) トボしい。新聞でも雑誌でも、その観点からチェックしてみたい。ただ言いたいことを簡条書きにするのであれば、接続表現は必要がない。ある主張を解説したり、その理由を述べたり、そこから何かを結論したりする。あるいはまた、主張を (e) フカしたり、補足したり、先の主張に反論したりもする。予想される読者の反応に応答し、その問いと答えの連関を示すときに、接続表現が用いられる。接続表現こそが、「論理」を明示し、文章をモノローグ型から対話型へと開いていくことばなのである。

接続表現を明確に使うこと、なぜ自分がいまその接続表現を用いたのかに完全に イ になると、それが、論理的に書くために決定的に重要となる。日本語には論理を表現するのに十分な、きわめてさまざまな接続表現がある。他方、接続表現を多用した文章は美しくないとする傾向が、これまでのわれわれにはあったように思われる。だが、なによりもまず、初心者には意識的に接続表現を少し多めに使うことをおすすめしたい。そのために文章は多少ゴツゴツしてしまうかもしれない。しかし、美しいモノローグへの自己満足からは脱却しなければならぬ。しっかりと読者を見据えた、対話へと開かれた文章を書く、それが「論理的に書く」ということにほかならない。

(野矢茂樹^{のやしげき}『哲学な日々——考えさせない時代に抗して』)

(注) 先に述べた……本文より前の箇所での記載を指す。

問1 傍線部(a)～(e)と同じ漢字を含む語を、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、

(a) 16、(b) 17、(c) 18、(d) 19、(e) 20。

(a) チョウシユウ

16

- ① その作品はかなりシユウイツだった。
- ② シユウチ心を失ってはいけない。
- ③ 団体の離合シユウサンが続いた。
- ④ 円のガイシユウを計算する。
- ⑤ タイシユウ文化を学ぶ。

(b) オウオウ

17

- ① オウチャクな態度をとがめる。
- ② 車が頻繁にオウライする。
- ③ 適切なオウキユウ処置がとられる。
- ④ 武道のオウギを極める。
- ⑤ 証拠品がオウシユウされた。

(c) シシン

18

- ① ラシンバンを用いて航海する。
- ② 税金のシンコクをする。
- ③ 作業をシンチョウにすすめる。
- ④ まさにシンシ的な態度だ。
- ⑤ 姉のニンシンが判明する。

(d) トボしい

19

- ① タボウな毎日に疲弊する。
- ② 資源のキユウボウが著しい。
- ③ ダンボウ器具を新しく買い替える。
- ④ 話題作のボウトウを読む。
- ⑤ 国家のソンボウの危機に直面する。

(e) フカ

20

- ① カモクに作業に取り組む。
- ② カダイの多さに四苦八苦する。
- ③ 体にフカのかからない動きをする。
- ④ 長いカモツ列車に遭遇する。
- ⑤ 生徒の作文にカヒツする。

問2 傍線部(1)『先生、今日の授業、分かりやすかったですね』と言ってきた」とあるが、学生がこのように言ったのはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

解答番号は、21。

- ① 授業だということも忘れ、生徒のことはそっちのけにして自分の世界に入り込んでしまった教師の姿に反感を覚え、皮肉のひとつも言いたくなかったから。
- ② 問題を解くことができず、悩み苦しむ自分の姿を隠すことなく生徒にさらけ出せる教師の率直さに共感を覚え、心理的な距離が格段に近づいたから。
- ③ 専門家であるはずの教師でさえも解けない問題があるということを知られ、ならば学生の自分もつと真剣に考えるべきだと気持ちを新たにしたから。
- ④ 学生が授業に求めているのは自分たちを無視した一方的な解説ではなく、生徒と共に考え、一緒に答えを出そうとする教師の姿勢そのものであるから。
- ⑤ 難しい問題を前に悩み、自ら問い直していく教師の言動から、どうということが問題となっているのかについて理解することができたから。

問3 空欄 A に入る最も適当な言葉を、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、22。

- ① 答えは考えていなくて問いだけを言っても
- ② 答えは分からせても問いが曖昧であれば
- ③ 問いのないところに答えだけ言っても
- ④ 問いは正しくても答えが出なければ
- ⑤ 答えと問いとがうまく対応しなければ

問4 傍線部(2)「書くことも同じである。」とあるが、どのような点が「同じ」なのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、23。

- ① 他者の存在を意識しないために自分の言いたいことばかりを表現してしまう点。
- ② 答えへの関心につながるような問いを発生させることが何より重要である点。
- ③ 一方的なモノログ型ではなく他者の存在を想定した対話型の表現が求められる点。
- ④ つっかえつつかえの進み方のほうが聞き手や読み手の興味関心を惹くことができる点。
- ⑤ よりよい解答を導き出すために自問自答を繰り返すことが最も大切である点。

問5 傍線部(3)「おもむろに」の、本文における意味として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、24。

- ① 間を置かずに、すぐさま
- ② 大きな声で、はっきりと
- ③ 十分に時間をかけ、丁寧に
- ④ 易しい言葉で、分かりやすく
- ⑤ あわてることなく、ゆっくりと

問6 傍線部(4)「それなりに工夫して原稿を書いているのでした」とあるが、ここでの筆者の「工夫」の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、25。

- ① 一般には使われない難解な表現を使うことで、読者のなかに筆者への畏敬の念が生じるように仕向ける。
- ② 本文を読み返さなければ分からない表現を使うことで、読者の主体的読みが可能になるように仕向ける。
- ③ 疑念を抱かせるような言い方をあえてすることで、読者のなかに明確な問いが生まれるように仕向ける。
- ④ あえて消極的な物言いをすることによって、逆に読者の問題への興味関心を高めるように仕向ける。
- ⑤ 分かりにくい表現を繰り返し用いていくことで、読者の関心を誘い問題意識を持たせるように仕向ける。

問7 傍線部(5)「経験を積みねばならない」とあるが、ここでの「経験」とはどのようなことか。四十字以内で説明しなさい。解答番号は、26。

問8 空欄 ア・イに入る最も適当な言葉を、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番号は、ア 27、イ 28。

- | | | | | |
|---|----|---------|---------|---------|
| ア | 27 | ① 理論的 | ② 実践的 | ③ 補助的 |
| イ | 28 | ④ ① 自覚的 | ⑤ ② 打算的 | ③ ③ 懐疑的 |
| | | ④ ④ 積極的 | ⑤ ⑤ 受動的 | |

問9 空欄 に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選
びなさい。解答番号は、。

- | | | | |
|---|--------|---------|----------|
| ① | I Ⅱしかし | II Ⅱそして | III Ⅱだから |
| ② | I Ⅱだから | II Ⅱただし | III Ⅱそして |
| ③ | I Ⅱだから | II Ⅱただし | III Ⅱまたは |
| ④ | I Ⅱしかし | II Ⅱつまり | III Ⅱそして |
| ⑤ | I Ⅱならば | II Ⅱつまり | III Ⅱまたは |

問10 本文の内容に合致するものを、次の中から一つ選びなさい。解答番号は、。

- ① 教師は、自身がうまくいったと満足感を覚えるような授業に限って、実は生徒に何も与えられていないということを肝に銘じるべきだ。
- ② 書いては考え、読み返しては書き直すという、気の遠くなるような時間の積み重ねのなかからしか、いい文章というものは生まれない。
- ③ 読者の内面世界に適切な問いを生じさせ、それに対する答えを彼ら自身で考えさせるようなものがその論理的な文章と呼ぶことができる。
- ④ 接続表現を多用している文章はけっして美しいものではないが、それでも初心者に限っては、それを意図的に使用していく必要がある。
- ⑤ 論理的な文章を書くために必要なのは、読者の存在を意識し、予想される彼らの反応に適切に応答し得る接続表現を使用することである。

国語 (20230205) 解答一覽

大問	小問	解答番号	正解
I	問 1	1	①
		2	④
		3	③
		4	②
		5	⑤
	問 2	6	③
	問 3	7	⑤
	問 4	8	②
	問 5	9	②
	問 6	10	④
	問 7	11	⑤
		12	②
	問 8	13	④
	問 9	14	記述問題
問 10	15	⑤	
II	問 1	16	⑤
		17	②
		18	①
		19	②
		20	⑤
	問 2	21	⑤
	問 3	22	③
	問 4	23	②
	問 5	24	⑤
	問 6	25	③
	問 7	26	記述問題
	問 8	27	②
		28	①
	問 9	29	②
	問 10	30	⑤